

延岡におけるこどもの目の相談

Children eye's cares in Nobeoka

九州保健福祉大学保健科学研究所・保健科学部

高木 満里子

【緒言】

九州保健福祉大学は、開学当初から地域との密接なかかわりをもつ大学として存在してきた。今回、宮崎県眼科医会から延岡市民を対象とした『目の健康講座および目の無料相談』のための講演と相談員の依頼があった。

保健科学部 視機能療法学科は地域の福祉と健康に貢献するため、視能訓練士である教員が『目の健康講座および目の無料相談』を通して、保健・福祉分野の役割を活かす目的として協力した。

【対象および方法】

『目の健康講座および目の無料相談』は、平成16年10月2日（土）14:00～17:00、カルチャープラザのべおかで開催され、参加者は延岡市民300名、本学部生視機能療法学科学生（80名）が聴講し、2名はボランティアとして会場案内係、視機能療法学科教員3名は受付を担当した。

健康講座の1題目は宮崎大学医学部眼科学教室の直井信久教授の「お年寄りの目の病気／白内障・緑内障・加齢黄斑変性」と題して講演があった。2題目は、九州保健福祉大学の保健科学部 視機能療法学科 深井小久子教授が「小児の情動を豊かにする視能」と題して講演した。

目の無料相談では、本学 視機能療法学科 高木満里子が相談員を務めた。対象は2名（10歳、5歳）で、祖母、または母親とともに参加した。

【結果】

事例1 10歳の女子。祖母と同行。

相談内容：左眼の視力障害。生来より左眼の器質的視力障害があり某眼科にて治療経験があった。しかし視力回復は望めないとの診断を受け、現在は経過観察中であった。今回、視能訓練により視力向上が期待できるか祖母と相談にきた。眼鏡を装用すると目が悪くなるのではないかと心配していた。

助言：症例1は、視能訓練の対象にはなりにくいことと、そこで日常生活に必要な視力を説明した。学校で板書が見える遠見視力は0.7、国語の辞書が読める近見視力は、0.5、さらに普通自動車免許獲得の遠見視力は0.7の必要であることを説明し、今後は、成長に応じた屈折矯正をする重要性を助言した。

事例2 5歳の男児。母親と同行。

相談内容：就学時前検診で視力は良好であったが、内斜視ではないかとの指摘で手術について相談にきた。

助言および検査：眼位の定性検査を相談室でおこなった。内方偏位はなく、立体視検査であるtwo pencil testを施行し立体視が認められた。視力、眼位、両眼視の関係を説明した。

家庭でできる眼位検査である角膜反射法、写真における眼位のチェックの仕方をのべて、両眼視機能検査の重要性を説明した。

今後は、眼科専門医に受診するように助言した。

【考按】

『目の健康講座および目の無料相談』を通して、保健・福祉分野の役割を活かす目的として2名のこどもの目の無料相談を行った。1例は視能訓練の対象ではなかったが、相談者は日常生活の視力には屈折矯正が必要であることを理解し納得することができた。症例2は、相談室での定性検査により偽内斜視が推察できた。

医療は、疾患に対する治療をおこなう。保健は、健康を維持する目的がある。治療の対象にならない事例1の健眼にたいしては、成長の変化に対応した屈折矯正が必要である。

「眼鏡を装用すると目が悪くなる」この誤った認識をただしく理解し、納得させる必要があった。将来あるこどもにとって視的生活の質 QOVL(Quality of Visual Life)を高めるために屈折矯正を正しく認識することは重要である。

事例2は、斜視治療は整容的と機能的なものがある。後天性斜視は複視の出現により日常生活に支障を来すため、両眼視機能の重要性を説明できるきっかけとなった。

【結語】

今回、延岡市の2名のこどもに相談員として接したことは、地域に貢献する方法のひとつであった。視機能療法学科は、延岡市民の目の健康管理と QOVL の視能矯正の体制作りをめざしたい。

※本内容は、平成16年10月2日(土)に開催された宮崎県眼科医会主催の『目の健康講座および目の無料相談』を記載したものである。

参考文献

日本眼科医会講習衛生部：三歳児健康診査調査報告 平成13年度.日本の眼科 2004.75